

## シリーズ第6回 梶原町 「重要文化的景観」申出区域

清流通信読者の皆様こんにちは。今月の『重要文化的景観』の各市町レポート“最終回”は梶原町からです。



↑ 神在居の千枚田の石垣。近隣河川で採取された自然石で積み上げられている。

梶原町は高知県の西北部、愛媛県境に接し、四万十川の支流梶原川が北部の四国カルストから南部に隣接する四万十町へ貫流しています。梶原町はすべて山の中にあるといってもよく、かつて『土佐のチベット』の異名をいただいたこともあり、山間地の代名詞のような土地柄でもあります。また古くから伊予との交流が盛んで、この地域独特の津野山文化を形成してきました。

梶原町の文化的景観は「上流域の山村と棚田」がその特徴で、申出区域は四万川川と梶原川の合流地点で上流部と中流部に区分しています。上流部は、河川が直線的で急流であり、集落や耕地も急傾斜地に形成されています。中流部は多くの支流の水を集め川幅が増し、集落は小規模な河岸段丘上に形成されています。また四万十川の特徴である蛇行が始まる地点でもあります。

町内各所に四万十川特有の沈下橋が掛かり流域の集落や農地を結んでいます。また流域の田畑は近隣の河川で採取された自然石で積み上げられ、その大小の石を組み合わせた素朴な石垣からは、老若男女こぞって石垣積みに汗を流した往時の姿と、幾代にもわたってそれを維持してきた先人の苦勞が偲べれます。中でも神在居の千枚田は町内で最も規模が大きく、四季折々の美しい景観を見せてくれます。ここは「棚田オーナー制度」の発祥地でもあり、大部分の棚田はオーナーとの共同作業により維持されています。

また、町の面積の91%を占める森林は、地域の生業と深い関係があり、南国ながら数十cmの積雪を見るなど、県下で最も寒く厳しい自然環境の中で、古来から農・林産物の複合経営により主たる生業をたててきました。町南部を中心に広がる国有林は、選定申出面積が2,433ha余りで、南部の主要な景観を構成しており、かつては木材の搬出でにぎわいました。国有林の一部は伐採せず風景林や保護林として自然林のまま管理され、人工林と自然林とが稜線を織りなす独特の景観を構成しています。

近年、FSC国際認証林の拡大を図り、環境に優しい森林の育成と、四万十川源流域として水量の確保と水質の浄化に努力しています。また木質バイオマス事業などにも積極的に取り組み、新しい森林との関わりの中で持続可能な森林経営をめざしています。

↓ 中古屋橋（ナカゴヤバシ）



↓ 四万川川に架かる竹の藪沈下橋



↓ 久保谷山風景林の巨木

